



開卷驚奇俠客傳

第五集

金

弋



3157
22



3157
22

亦、
又、
又、
又、

あすこ、
あすこ、
あすこ、

肥後守

開卷驚奇俠客傳第五集卷之二

浪華 蒜園主人編次

第四十三回

假不智姻と諾く家寶奪主不復る
巧不智辨と揮ひ女俠叔父と窘む

再説楠正直の姑摩姫を論破せらるる。再遍説へき義もさ頭と垂て在るも
肛裏小想へらく。恚て一事の做らるる。遊佐不這言ひうとも免さるべし。鐸も
わらざ。然有とて姑摩姫を為體語る。氣色は些もなき。進退這首不谷も
現豪族小役せらるる。意外の恥辱あり。如今姑摩姫が道と。如く俺家は是れ祖
三世南朝小忠と盡す。父が一旦北朝へ降る。當下より。如く物氣と衰へる。正
念へ有繫不裏慚く。頻々嗟嘆たり。智もなき。勇もなき。老實人の心算
小こも一味地不想回して。覺期を究め。恚ゆる。身は非不及。道と。由と脱も。

金長
大入
金長
金長

英文傳第五集卷二

浪華

復命への易々も。然有とて免さるべくも非ぞ。慙不違説の罪と被らるる正直
 這首不自殺して。室町殿へ解説とせん。外を為術もな。未だ哉といふまゝに
 腰の小刀を抜出し。衣領推甘げ座を組て。肛を截んとあす。姑摩姫の願ひ
 安次立で仕しく。己が脇差の小刀を。開頭を技乗上前寄。刀拿する正直が右の
 腕を取扱て。必急過りふふと。推禁する。正直の頭を打掉て。尾籠へ復一即
 開首放。びやと焦燥。姑摩姫徐声係と。御短慮と稟とべ。奴家が回答
 と稟も上ぞ。開休不御生害ありと。も。己身の功といふべ。一旦の義理を。述
 侍ども。然らう。思欲も。あつ。花商量も。又と収め。安次意
 得て。刀を強て。拵放。鞘曳寄。と。遣と収。傍側不措。伺ひ。正直は居直。と。と
 さへ。誓姻と承允する。と。道不姑摩姫點頭。室町殿への解説。不自害せん。と。まで

謂。尚為術も侍。べ。親事の一件。男女生涯の大禮。され。父母の命
 小遵ひ。治定。辨。奴家の父も。母も。と。孰人の命と。此一條と
 全う。見。這義と。思惟。那禮記の文。と。叔父と。父と。謂へ。も。己身の。父と
 志同。と。憐。且。媒。姑摩姫。と。那本文。も。處。道。正直。和
 ら。開。然。道理。も。と。辨。權。と。變。權。と。以て。行。亦。尋
 常の理。既。和。女。即。父母。も。命。と。所。義。絶。の間。も。也。
 上皇。も。柳。宮。も。在。下。と。父。と。令。下。さ。上。所謂。權。小。處。も。也。
 強。非。禮。と。謂。へ。又。媒。姑摩姫。も。在。下。が。執行。も。辨。と。遊。佐
 小議。と。期。小。賢。也。那。人。と。以て。月下。翁。と。居。屈。て。這。意。不。任。正直。一家
 再生の恩人。も。一般。ら。と。只。管。勸。解。と。止。姑摩姫。聊。吟。と。奴家の
 女兒の。も。萬。愚。と。知。辨。と。縦。計。絶。交。の。叔。父。も。

父親不當として做すのあらぶ。随意料理ひあつ。と道小正直大怡悦びきたる承諾せ
 らま。念事の歡喜う是及ん。と道由遊佐へ参りて。言稟とまらるるを。那里
 ももさるか大慶せん。開就て一議あり。和女郎の義烈勇猛ふて上命ともとせし
 屑とせ。是故小倘暫姻成就とも。期小暨て翻語する。めらんも料とせ。され
 開笑据の與小異國後世の禮多と。庚帖八字と字とせきよ。就盛傳へ。う這
 是非常の才女ある。亦是非常の禮と以て。後の狐疑を解んと。既小納得の
 一へ。這些の事とらぶ。もめら。と權家の豪囑辭さる。縁あり。希とら。一
 筆写て。那が心地と安とせ。と道邊程小東西把柄めて。先在下を宿所へ移。然と
 準備すべき。這一條。在下が總束一身小閑。これが念まれ。念まれ。道る。ま。か。
 荆妻と商量とて奔走せんと。道が姑摩姫微笑て。おん宿所へ参らん。の安き程の
 滓めら。と道。這莊院も。久々住馴ひ。所従の奴僕は落着も。猛可。料らひ

難。這誼の兄さ。せ。あ。と。さて又庚帖八字の滓。我邦の政実。の听も傳へ。事
 あり。と。孰が引出て。今番の替儀不行。とい。う。一切心得。回。とも。推辞。ま。云云
 小又紛々。謂。ん。欲。写。ん。小難。さ。ゆ。め。ら。と。那庚帖。の。作法。あり。先。兩。尺。の。紅。蝦。子。小
 金字。小製。して。其。上面。小釘。て。差。を。例。と。听。と。さ。ら。の。東西。まで。準備。ある。欲。と。向。ま
 て。正直。原。末。も。這頭。の。委。曲。と。知。べき。あり。秘。開。と。む。り。隱。口。の。僅。小。額。と。拵。て
 道。や。う。今日。の。遊。佐。より。直。小。来。と。ば。さ。る。東西。まで。の。齋。せ。日。快。贈。来。ら。ん。と。ら
 小必。八。字。と。寫。て。ま。と。い。ふ。姑。摩。姫。回。答。て。い。ふ。や。う。叔。父。君。萬。事。父。と。と。準備。し。ら。ん
 滓。め。ら。事。毎。小。奴。家。が。意。と。向。ふ。べき。み。あ。非。ど。され。件。の。庚。帖。も。這。ま。で。あ。せ
 ら。要。あり。金字。の。工。人。小。詭。属。て。製。す。る。よ。う。唐。土。も。信。ず。る。滓。と。所。見。され。自
 筆。小。寫。で。も。よ。め。り。八。字。と。生。と。一。本。命。の。年。月。日。時。の。支。干。と。四。柱。八。箇。の。文字
 あり。丁。丑。丁。未。辛。未。巳。丑。の。八。箇。の。文字。と。製。せ。る。と。い。へ。正直。一。議。及。ら。ん。と。ら

緯多好きあふ。のろく伏し製作せん。と道々矢立の筆と把出。質問いあがら件の
 八字と又其式と扇の裏面ふ委く記認め措て傍邊の刀搔把て。稍身と起し
 言やうの愚老が芳の甲斐ありて頓の承允更是祝着の至きふひく。那里へ
 告て。近き程小良辰と擇びて儀式と行ふ。努力違愛せしむと。語と番ひ
 安次ふ勞と謝し。且の羞且の歡び勇む。伴當們と催促して。河備の宿所へ回と
 々。安次されと玄園まで看送と果て忙し。垣衣と率て。姑摩姫の前ふ参りて稟と
 へ河備さるの疎忽さる。姫への御心と知せあらぬめと。怎ふ權貴の囑ありと。命
 命ふ換て愉快らぬ。御親事と苦勸あら。只是柔弱のめん性質ゆゑ。甚以て所謂は
 開い今更論べきあら。と。姫への又怎生して。這昏姻と許諾あら。預てのめん氣貫ふ
 肖もやらぬ。最めん心軟きやう。小憚あら。存る。尚僻事ふ。款定ふ許して。赤阪へ嫁ぎ
 るふ。如何と。另小仔細も。款願ふ。示し。と。怨む。如く向撃と。垣衣も亦語

と。述て奴家も。ん次席ふ立解と。河備さるのめん話説と。羨あ。漏承り。怎ふ
 成ゆく。緯ふ。と。心と冷して。侍りふ。き。と。念ひ。犬息と。吻々。と。姑摩姫へ。微笑て
 今ふ。始ぬ。你二人が。心盡い。然と。有る。ん。され。とも。痛く。物と。想ひ。と。吾儕。あり。と。分別
 も。め。漫承。承諾。べき。ゆ。え。恚い。め。れ。ども。叔父君の。愚直。小怯弱。き。めん。本性。と。權門の
 強囑。と。固辞。の。心。諷。小稟。て。来。ませ。と。念慮。の。伏し。小窘。め。と。論。論。緯。由。と
 權。あり。人。小對。ひ。の。介。解。と。も。無。と。も。小想。逼。と。て。忽ち。小自殺。せん。と。い。と。と。一
 へ。虚嚇。鬼。ふ。め。ら。ど。実情。あり。這。心。小。き。人。の。う。へ。む。往々。ふ。め。る。べき。該。除。非。父。君
 と。絶交。の。叔父。の。命。と。殞。され。れ。と。て。正成。卿。より。累世。の。忠義。の。道。と。外。と。と。非義。の。義
 め。の。隨。順。ひ。回。り。然。あり。あ。が。ら。眼。前。小。妾。と。與。小。死。ん。と。い。と。と。叔父。と。放棄。と。殺
 め。せ。開。満。家。們。が。希。ふ。處。と。て。開。と。妾。と。惡。名。と。と。謀。事。の。事。ハ。必。あ。ら。ん。と。思。惟。ハ
 霎。時。推。禁。と。陽。小。那。意。小。任。せ。後。小。為。術。の。め。れ。案。ふ。今。番。の。昏。姻。と。太。上

皇の院宣とのひ又足利家の内命とぞ。いとも開け搦鬼を。満家も又就盛が拙策ふ
 疑ひか。義持愈々暗弱なりとも。即今武家の棟梁とぞ。徳胡亂の内命と下
 づもめらざる。満家も亦主の前を。寛家の裔と兒孫が媳婦配耦と議とべ
 き非ど。那庚帖の倅まで引出し。うとて按が生博識の僧。儒交とて。籌策とら
 べし。されば這首も開策。就て一箇の奇計と構へ箇様々。料ら。那重御旗と
 拿回せ。きりもあらん。又叔父君も死と免とて。使侍とる。倅もあべ。衆計満家持永
 們が怒り。怒るものありとも。主訴訟んや。もある。更が為方便を。努々愁と
 低語。安次听て。額拍念ひ。笑と會ら。這珍奇。き御籌策。現姫の神机
 妙算。鬼神も克知る事能。駭入て。怎生や。も御深慮のあべき。ゆと。海
 多。甚薄情。き河備。るの。ん苦勸。腹立。と。料ら。不敬と。票出。て。畏入。ひ。ひ。ぬ。
 但今般。倅。濟とも。満家們が。懲す。執念。宗。ゆ。あら。権威と。奮。ひ。て。怎。様。の。

仇と做んも料難。這誼。奈何。ひ。べき。い。ば。姑摩姫。嗟嘆。と。妾も亦。開頭の倅
 と。念。き。ふ。あら。ね。ども。然。有。と。又。如何。せん。他術。と。變。て。謀。る。る。俺。も亦。差。と。換。て。做
 べき。け。の。防禦。べし。き。とも。縁。故。は。軍。兵。を。擡。り。推。寄。来。と。結。果。と。の。倅。の。あ。り
 べ。し。ぞ。任。他。さ。る。る。の。あり。とも。開。其。响。應。と。怎。れ。も。方。便。の。べし。倘。天。命。の。盡。さ。ら。ば。
 甚。麼。も。助。助。あり。とも。遁。る。不。道。あり。命。一。箇。と。忠。孝。を。殺。し。て。仁。義。を。全。く。せん。而。已
 今。より。按。さ。る。る。と。詞。涼。と。説。諭。せ。ば。女。次。險。不。慚。愧。し。宣。處。定。然。る。唯
 左。も。右。も。天。命。を。任。せて。義。理。を。失。れ。ば。肝。要。を。と。ひ。ら。き。と。身。づ。ら。禍。害。と。醸。と
 べき。ふ。も。い。ち。ば。俺。々。努。力。の。暨。ん。む。心。を。配。り。ひ。つ。と。退。き。出。る。不。題。再。説。正
 直。の。外。外。姑。摩。姫。が。親。事。の。倅。と。會。得。ま。ば。大。お。飲。び。興。頭。で。當。日。の。既。不。晚。景。か
 且。先。俺。宿。所。河。備。の。回。と。木。石。若。子。と。喚。出。し。今日。就。盛。不。吟。呻。し。倅。より。八。九。の。院
 不。到。し。倅。ま。ば。借。箇。々。と。詳。く。報。て。是。れ。這。持。永。が。曩。倅。の。就。ぎ。し。と。本。意。を。く



安づく



あつこころかへんおろそ
 さうらに
 おつこころかへんおろそ
 さうらに
 敦義使到八九荘院
 おれとえき
 うらまの涙

あつこ

念ひて父親不密訪し。上命と借て素懐と遂んと止つる。不疑念る。この惟へも
 勿々おもひ内証とある。只得言稟して那裡へ去る。そのうち。那姑摩姫が氣稟
 せし。おもひも納得はたまふと想ひ。酷く辛勞し。左から右に穿就て吟呻し。俣ふ八
 字をも強て語り。めづる。既ふ心易き。似う。然る。あれども。這後とも。萬事。俺們父
 不倣て準備せよ。この命も。又甚麼。穿と。説出せらん。曾易ら。ぞ。想ひ。も。這。の。總
 来俺一家の大事。及ぶ。べき。され。ば。槩。畧。他。が。い。ふ。俣。や。と。違。宴。と。い。ふ。せ。ぬ。や。う。ふ。せ。ぬ。は。
 不測の禍災も出来つべ。され。ば。衣服。調。度。の。打。点。も。着。苦。々。々。に。調。へ。ど。管。領。の。野。思
 も。多。う。い。ふ。し。這。首。の。俣。は。你。們。母。子。の。打。任。せ。ま。は。甚。麼。ふ。ま。れ。意。と。用。ひ。て。恰。好。の。沙。汰
 して。誰。へ。屬。あ。り。足。り。ぬ。東。西。の。風。爐。へ。即。ち。吟。呻。て。買。ま。せ。し。明。日。の。詰。朝。の。遊。佐。許。ま。く。
 尚。省。示。譚。ふ。及。ぶ。し。倘。風。浪。あ。り。俣。整。々。管。領。父。子。の。權。勢。り。て。官。途。の。首。尾。も
 宜。し。う。い。ふ。解。道。為。あ。り。と。已。の。野。の。後。の。榮。華。を。拿。交。て。私。語。告。ま。い。木。石。若。子。の。所。つ。想

ら。吐息と。吻き。そ。又。御。劬。勞。の。俣。の。傳。り。衣。裳。の。ゆ。い。音。得。傳。は。と。那。人。の。氣。お。愜
 ん。俣。の。い。と。覺。束。あ。り。こ。そ。傳。り。開。け。左。も。右。も。あ。る。べ。い。と。平。生。の。任。情。任。性。の。人。は。
 猛。可。お。屈。て。會。得。を。れ。上。の。御。説。の。故。ら。ぶ。れ。ど。危。殆。き。の。お。傳。り。と。尚。省。小。心。
 ぬ。と。信。じて。諫。ま。す。正。直。頻。に。打。領。を。開。け。心。得。う。心。得。う。信。と。も。今。回。の。借。箇。の。俣
 あり。他。が。生。来。の。支。干。の。八。字。を。照。据。お。把。て。回。す。れ。ば。よ。も。違。約。の。賢。ぶ。は。と。那。扇。子。を。示
 せ。る。ま。は。二。人。の。扇。子。を。把。拳。て。倘。き。ら。る。ゆ。い。心。安。堵。傳。り。ふ。き。と。口。の。い。へ。ど。心。裏。の。猶。も
 危。殆。く。想。ひ。多。う。借。而。正。直。の。開。詰。朝。遊。佐。の。城。へ。赴。き。て。就。盛。お。對。向。し。昨。日。八。九。へ。去。到。し
 て。姑。摩。姫。お。苦。勸。し。る。一。五。十。と。説。示。し。て。案。お。錯。れ。姪。女。が。偏。氣。箇。様。や。お。稟。載。て
 一切。隨。順。さ。す。ま。は。在。下。大。困。果。唯。一。事。の。倣。せ。ら。る。も。他。が。稟。し。説。の。俣。お。上。對。し
 て。復。ま。べ。も。あ。ら。ど。詮。方。も。と。覺。期。を。究。め。自。裁。し。て。分。解。せ。ん。と。ま。倣。さ。り。と。姪。女
 や。り。心。解。て。先。ち。稟。致。し。と。さ。ら。う。い。ふ。那。庚。帖。の。俣。と。も。稟。出。て。試。し。し。俣。と

稟は故本命を聞きえ。但在下が宅へ曳移んとし、一條の一條は、期ふ
 暨ふまて御免を被るべく稟う。あれども強て稟多。他亦必異誼を説ん、欽這の
 畢竟小夏おとば先貴老お伺ひ、後小為方便もあらんとて、開任やと回さうとて。
 尚詳承お報し、就盛聴て大歡喜の上の御誕おあるれが、お稟おらん、勿論さう。
 令姪女の心操お再三辞退もせらんと案外お只一遍お庚帖の譯まで果され
 うる貴所のお幼旁查入う。這旨を以て管領父子お回報稟さ、満足おらん、但し那
 庚帖の令姪女の自筆お寫さうと、向正直されが、自筆お寫けといひ、お他云々
 の作法おれば、在下方お調ふべとて、支干をりて示さうといふ、就盛眉を顰め、開
 聊不審さ、と開開お省る。猶又序次の事もあが、那名をりも、令姪女の自
 筆と添て写さるめ、映諷と看らる。といふ、正直諾ひて、現然おあらんと想ひ、正
 直道さう、姪を難論さう、中お在下お父親と做さる、另お媒妁のなると稟、故

おその期お至ら、貴老お商量と託せと、りき、這の孰人も、且さ、如るれ、原来
 他十分お任情を稟ん、御煩勞さう、期お至ら、席お臨、指揮と賜さる、と伺へ、
 就盛も領、きく、愚光當國の守護代、私の縁譚お聞さる、おれ、他、お管
 領家の婚姻も、且御内談の趣も、お不肖さう、媒妁の譯さう、勉む、任教彼
 此の所要も、お條持媒鳥お吟、料理する、お有、お萬、他と議さる、といふ
 小正直意を得て、當日お宿所へ回さう。就盛おら、措、お條持媒鳥を喚出、と正直
 が、説、由を委、示、と持永が、赤阪の館差、又、お登、お満、おも、譯
 恣々と報さう、持永おられ、と、天へ、お上、お心、地、と、怡、望、外、お出、と、先、親、奉
 勝、お情、由、を、告、お媒、鳥、お旁、を、太、く、賞、お酒、饌、を、出、おさせ、お前、祝、の、酒、を、只、管、打、吞、つ、
 那、姑、摩、姫、が、評、品、の、お、開、日、お、莫、て、翌、日、お、持、永、親、ら、就、成、お、城、お、お、て、お、謝、し、又、
 赤、阪、お、迎、へ、来、り、と、大、お、酒、宴、の、筵、席、を、開、き、就、盛、を、款、待、つ、お、彼、お、の、進、退、を、商、量、

ろん。一日と千秋の念慮も満家の回答を听良辰を撰ひて开程の儀を行くと歡
 勇も満家も亦鸞九郎も縁譚整ひる由を听て原来預ての計議の如く。姑摩
 姫既小言小罹と心易くと歡喜つ。就盛持水も消息くと萬端开地にて脱落
 る料理ふと許しとば就盛持水と商議すと本月二十日と最上の吉日と撰
 び定め采納の物件を正具が河備の館へ贈去んと專开準備とす。泰勝媒鳥
 們小分付て先その打白と做しひり小持永只麼氣と張て滓治定とす五荷七
 種小尚更滓と増補へ黄金白銀堆く積上るとも枕飽足後親ら目録の指
 揮と。東西二箇づ檢監し。中も楠家の重寶とす錦の御旗已下の東西の
 舊二重箱も上小又島桐にて外重の箱と最も花麗小造せて恭しく臺小載せ
 媒鳥小鸞九郎と相副て奴隷小對の皂被と着せ各跟随苛めとて差さん
 とぞ構へる。正直の庚帖と分付し俵小製せんとて。工人を口て件の金字を急忙と

詠へ囁。一日も疾くと促して辛うじて整ひと自身小携へて八九へ去き姑摩姫小對面
 して名所むりの自筆小寫とて就盛がへるよと。諄回と勸解とをば姑摩姫要時
 沉吟とてとまで小宣ふゆらば。這來へ寫付んとて。と墨里小寫とす。正直
 大小歡喜とて就盛ふれんと示せ。就て金字小製し。又小塔引出の料もて金壯衣の太刀
 一口小札好き鎧二領と目錄の外小相具と。當日の來ると等小なる。滓の紛雜とすべく
 もありと。新郎岳翁の両家へさへ。就盛も只這件のゆ小朝暮奔走し。うらり
 現室町家の權臣も。畠山家の媳迎ると。偕も有べき該是か。又持永の好色の
 意小諂ふ就盛們が事と好と。拿栄と阿諛面従の小人。情態這里小想像へし。
 間話休題。偕而此日の早天小亦。亦改より使者と出と。河備の館小采納の物件と
 贈來と。湯浅敦義とんと稟採正直小披露す。正直使者小對面とて。式の如
 く饗と設け。引出物と與ふ。使者の賀と演恩と謝し。亦改の館へ回と。程も

あつせび正直の敦義も分付て件の物件と又更ふ八九の莊院へ差せぬ敦義禮
 服と粧ひて伴當夥多し進物臺と吊せて八九へ行到り安次と喚出て今日も吉辰
 あるとて赤阪殿より米納と贈越とつらつら就ち小可小余せりまで直下學と奉す
 這由稟上らるべしと恭しく懐中より目錄と投出て遞與し安次んと披露
 しく。姑摩姫の看完と安次も令説やう仰の趣承りぬ。されども今番の誓姻の
 叔父君より父親とて料理の弁解も且。這等の東西も奴家の方小留措きやう
 いかう叔父君こと此れとちん費用も多うべしと切てこれに収めあひて千の一箇も
 償ひぬ但し當家の重寶う錦の御旗菊水の旗祖先手澤の文書類の原是奴家
 が東西の是れ這件なるの稟受てその回帖の恭ららるべし。這等の由と叔父君も宜
 く提擲稟せしと言寡くの聲も隠々漏と听えう。安次出て敦義も右の次
 等と演説と當下敦義道々開け宣ひするゆゑ。這物件の塔君より信比

東西の是れ。枉て受収ゆるべし。主人諄々稟とて是非とも御受納あるや。お
 押して稟上らるべし。這儘回らるる在下。脱落して咎めらるる。いそぐといひまはる。安次
 再遍内へ入て敦義が旨と報る。姑摩姫重経で道やう。風爐八郎といふ所も一理
 ありて覚ゆと。這等の件の御日本奴家自ら叔父君稟するゆゑ。萬端父親の
 隨意なる。鎖細の儀まで細々と奴家も報ふる及ばぬ。と稟措奉らせし。信比
 しく。使者の脱落。あつせ情由の更なる。大詛ふことと鷹揚。いそぐ。伏ふ
 安次が又外へ出て演々。這ういふ。這ういふ。敦義のさう。回りて開由稟え。おん重座を
 是として件の箱と安次も遞与し。小可小余の受拿と姑摩姫小披露と。姑摩姫
 得と查看て。故の如くお益と。那外重なる島桐の箱と。臺に載て。既小重
 器の受拿ぬ。此箱の一回稟と。復一帖回帖と。一筆寫て遞与す。といふ。安次意得
 て次へ出づ。認りて立出て風爐八郎。件の旨と言傳へ箱と回帖と遞與せ。敦義

へ眉と鬢り這相へ這儘小這方小差措ふべし。これ又携へ回さるる甚麼とやらん
 不祥ゆきて必主公小叱らるべしと推返せと安次も又推返して。いぢる趣充ふていへ
 ども知る如く偏窟ある主人の氣質ふいふ凡番稟ひとも。決して受納致せまじ。
 一旦回して河備さま稟上らるる徳るべし。といひ敦義為方かく疑念も這里小
 起しども暇と報て那箱と再件當ふ扛荷せ。河備小回りて正直小箇様々ふひ。と
 いひ正直案小相違へ想難て棄も措とび就て遊佐許去向ひく件の情由と話
 説と怎小せまじと商量せまじ。就盛りや訝して開亦奇怪の緯ども。然れども
 這些の小事と云云と論辨せ復もや緯の障とあらん詮ずる所小輿入と急小促せ
 せよ。めと幸来月朔の婚禮小最上の吉日とすもいふあど。左馬殿小商議とて
 性急あども準備と做べし。管領家へ在下より達せむ故障あらるべし。互の混雜
 査しやと。緯遲滞と違愛む。悔とも開甲斐あらるべし。貴方小準備整は

とも。對譚のうへ鹿漏とらるる。這旨と以て御令室おも。媳婦君も報られて
 快々打魚せらるべし。といひ正直異議不及。開火急の義とすども。いささか所も
 道理あり。隨分料理まらるべし。鹿漏の緯の後々小補ふとゆるん宜く稟入らるべし
 と言稟して私身小回り木石サロ子小這由と告。眉小火の着く嫁娶打魚小夜もと
 ち。寢と寐ねまで心と盡して管つ。次日の姑摩姫小緯由と自ら報て。諄回つ
 期と約し。口と堅めて回らる。持永小就盛より。火速やう。趣と報おせむと。大に
 歡喜ひ獨漫小雀踊して鎖細の事とが糺しも問。月の桂枝と折。龍の領の珠
 と得る心地も。只旦夕小恭勝們と急して。嫁迎の日小役割と。輿の受入
 遞與まで室町様の故実と調べ。紋切形の試業とせ。或又親迎の打紛は。果
 調度跟隨の形容とあらんと。品定まで。此彼と多し論ひ。鳥帽子小當家小左折
 狩衣の色小何よけん馬小鴨毛小眼を立て。女小惣来美麗と看ひ。あく黒毛小厚塗の

紅色の相應しうべし。鎗の例の片鎌う。否それぞの片との字が。禁句あるは十女
 字の對道具が撮合愛うひん。さて伴當の几各を。豫て算へて俸足ど。遊佐不議して
 準備とさよ。跟随の重役の。差桐木エ介が役あると。所て恭勝沉吟。遠巡しつ
 回答る。仰と背くもいひり。嚮も稟上う。如く小可の雙言持ある。回と露し馬
 小騎で晴かき。きあん伴當の。顔けう。險々迷惑ひ。とせも果を持水と眼と
 睜と聲高や。小の。李今甚麼と。前番も既ふりひ。う。如く。這河内の采地にて
 咱們が伴當小疎忽ゆんや。況や今番の多勢と率連。家格と正とゆく。行列の誰
 う敢て僻事せん其誼へ心安うべし。尚开仇敵の撞見う。追取稠て一人も漏れ。結
 果さ。後日の憂と攘ひて枕の高きふ。や。心強く跟随と。和郎が在り。那這と。滓
 の不便の多う。人小。那偷看る。美婦人。と。俺倅成ての上う。和主が妻小得させ
 てん。か。和主も親迎の。伴當小外う。所謂の。と。窘められて血氣の。丈夫有繫

小不口ともひ難て。さ。伴當小立ひ。さ。とて不測の憂の。う
 必者乗ある。と對へ。承諾と。尚云云と其程の。準備と。齊一急ぎ。う。
 悠間小正月も疾く過去。二月朔日。ふ。正直の。姑摩姫。と。先俺方小迎
 へんと。晩う。湯液。敦義小。幾名の伴當と。隸と。新小製。う。轎子の。金具。稠く。光る
 が如き。轎夫六名。お。専女の。乗へ。き。跟随。轎子。難。刀。其。傘。小。至。ま。花。麗。粧
 ひ。八九の。莊院。小。着。う。小。要。時。あり。て。敦義。の。奴。隸。一名。と。後。へ。着。忙。う。走。回。り。
 正直小稟。う。仰。小。任。せ。莊院。へ。参。り。今。宵。移。ら。せ。あ。る。べき。由。と。申。入。て。ひ。ひ。小。隔。屋
 復一即立出。て。豫。て。今。宵。参。ら。んと。約。諾。して。ひ。ひ。も。姑。摩。姫。の。方。境。より。猛。可
 小腹痛。して。ひ。ひ。も。醫。師。小。診。察。と。せ。る。處。は。是。時。氣。小。傷。ら。と。て。飲。食。留。滞。せ。る。と
 小要時。總。ひ。ひ。が。就。て。快。く。あ。ん。と。稟。れ。侍。ひ。あ。ま。と。も。既。小。と。や。今。宵。の。俸。小。ひ。ひ。
 怎。ま。小。と。も。恭。う。う。平。素。も。侍。る。持。病。あ。ま。と。快。復。次。第。這。方。う。恭。う。ふ。と

ひん。と稟と依て案相違し。あや左や右や稟とれども。今宵出立るる氣色は
 えび。因てあん指揮と伺り。與伴當ど。那裡不残し。罷回てひと。のう正直一驚鳥と吃
 し。その又曾安うぬ。萍へ他尙病病不假託て。督姻の期と延し。遊佐より必
 唱們と疑ひ等閑へ。あど謹責べき。焦まども病氣とのふと。強て今宵迎入とのふや
 又甚麼緯ど。いふなるべき。這里あて物と想んより。俺自ら訪ひて。強て他對回し。
 容體を窺ひ。うら入机。應ど料理のふ。你も泰と急忙し。馬打騎伴當
 ども隨ど。敦義むうと跟へ。幕々地ふま。去き安次と喚出て。姑摩姫の病氣
 と伺ひ。和まも既知う。如く。今宵の督姻の私事。あつ後。確乎不病症。とも青屈
 ざ。日と延。さるも做が。是由ひ。是非とも對回せんと稟へ。勿論病床の俵
 中。て決して遠慮あ。さるも。この人が安次畏て。就て姑摩姫小報。うら。要時
 て立出。病中の誼ふ。一室小請。春らせん。却は無禮ふ。い。圖と阻て拜

謁とへ。這義と先。あつ。這方へ。い。正直を心。細事と回き。
 さら。案内と。後。跟て去て見。便室の紙門と左右小開。燈火も
 明々。ぬ小簾と一重繫て在り。开外面の小所。毛氈と二重鋪。て正直が座
 と儲け。太や。の蠟燭と燭臺。二脚小照。い。内面の動静。克も所音
 縁と女童二個。右と左。小衝居。開中央。ある。蒸令衣。小姑摩姫。靠り
 と白綾。たる。襦と。衣の。俵。在。有繫。髪も。蓬。と。さ
 ぶ。と。苦。腦。き。容。も。あ。端。然。と。在。正直。十分。あ。着。急。目。疑。さ
 限。な。れ。座。と。就。と。聲。と。掛。て。姪。女。今。宵。病。う。と。か。怎。さ。の。緯。ふ。の。既。小
 約。せ。日。の。大。槩。の。所。勞。あ。押。て。轎。子。小。衆。と。や。俺。家。ま。の。遠。く。も。あ。ね
 小。醫。療。の。緯。の。宿。所。と。尚。又。心。と。用。の。え。い。と。道。を。ば。姑。摩。姫。と。さ。ら。ち。咳
 き。念。の。係。り。叔。父。君。の。親。ら。訪。せ。る。ん。と。最。も。畏。く。い。へ。も。病。中。を。行。は。無。禮。の

先もかゝ。晚より持病の腹痛起ると。轎子ふり乗せりもあらむ。今宵は得しも
 泰らぬ。後計奴家が泰らぬとも。御智禮の妨ふらぬ。傳はせど。就て快く成侍らぬ。
 快く泰して言祝稟え。遅引らう方小許させぬと。外々道々ま。正直大ふ
 驚駭き。開甚麽といふらん。病體なれば。術を疾く俺們小報もせて。酷く心
 と推せぬ。除非と右まれ。右まれ。約せし入興の今宵。あふ和女郎が在る。誰ぞ送らん。
 恁外。いふべきやう。いふども。姑摩姫空惚し。開宣はする。あふ。奴家の最初
 より持永の妻。あふ。いふらん。いふらん。萬支。あなたが父親と。料らひ。あふ。婿婿直
 へ。若子。御寮。こと。今宵のう。ち。入興。あふ。洋と。あふ。いふ。侍らぬ。と。知ど。氣
 小空。嘯きて。道と。听て。正直。い。面の色。赤く。成。又。青く。成。また。駭き。怒。て。物も。言
 と。尻。呆。る。り。半。响。ら。う。睨。ま。し。詰。て。在。ら。う。が。想。心。の。聲。と。振。立。て。原。来。和。女。郎。在。下。と。
 念慮の儘。小欺許。あ。恁。と。い。も。往。日。小。将。軍。家。の。命。と。傳。へ。て。洋。明。々。地。に。堅。約。し。ら。う。

小介後も又采納小とて。錦の御旗己下の東西と贈とらうと受し。非どや。殊お和
 女郎が生来の八字と明し。示し。下金字小調へ。尚亦自筆小和女郎が諱
 と。庚帖小寫せ。贈とらう。這半の證據あるもの。今更自う。欺ん。と。敦。圍。猛
 く。罵。ま。ば。姑。摩。姫。吻。と。打。竹。矢。ひ。て。御。錠。云。と。の。ま。ま。も。管。領。へ。の。御。内。書。と。う。花
 押。さ。る。丸。東。西。と。以。て。怎。で。う。定。と。思。ふ。き。又。俺。家。の。重。寶。の。嚮。不。夜。綯。の。草。賊
 們。盗。奪。と。ち。ん。身。の。宿。所。へ。携。去。ら。う。と。返。さ。さ。ら。う。東。西。あ。い。の。ま。ば。這。是。舊。主。の
 受。べ。き。理。義。ま。り。怎。で。う。これ。と。音。物。と。せん。這。義。の。既。も。稟。ら。う。其。餘。采。納。の。目。録。に
 你。受。納。し。あ。ひ。ら。う。ま。だ。然。ら。ば。你。の。女。兒。御。寮。若。子。ね。と。嫁。し。ら。う。ま。だ。ま。ま。こ
 本。命。の。八。字。は。洋。に。我。日。本。の。所。も。傳。へ。非。例。の。禮。と。あ。ら。う。ま。だ。公。然。と。て。議。と
 べ。き。非。ど。況。や。奴。家。が。本。命。八。字。と。持。永。小。贈。ら。う。ら。う。日。外。奴。家。が。寫。し。ら。う。の。口
 子。御。寮。の。代。筆。ま。り。丸。と。い。ふ。小。正。直。い。ふ。怒。と。い。ふ。様。々。い。ら。う。物。を。和。女。郎。が。自。ら



いさむら



正直 若子
あはれなる山田の
そわやちこゝろ
あはれなる山田の

いさむら

いさむら

筆把てこまと開講と寫さうと。女兒が代筆どりのふ抑怎ある強説を然と
 とも那八字の今も忘れぬ應永四年丁丑の年やと丁未の月辛未の日巳丑の時と
 和女郎が生来の総月の假令非例の禮ありぬと。今更遁とん路はと。いふと姑
 摩姫又打笑ひて。恁ら若子ぬの産とある月日と幾時と。想ひぬ。又奴家が産
 せしつる月日も知てありぬ。試験ふとせよと。道は正直眼と睜と。若子が産と
 同給の五月廿八日の曉天の八鼓より開と。恁生と忘るべき。又和女郎が産と。兄
 正えと絶交と。俺の京洛不在と。開晌の克も知れど。後小阿兄仕へる侍某甲が
 俺と慕ひて。帰降し。うろつろつ。十月七日といへき。且その総の十月の朔日就
 ち玄指と。つりい今も覚ええらう。といふ小姑摩姫安次と喚立といふ。奴家が
 手筈に。應永四年の舊曆の有るを快持出て。叔父君に令看せし。いとひひ。と
 ば安次の氣毒息。言稟し。曆本と。把出。扇子に載て。恭しく。正直が身邊に。指げん。

姑摩姫再び道々へ。該ふ云論う。證據。と。開曆本と。看ぬひて。疑念と。解
 ぬ。今年五月廿八日。小暑六月の節やと。即ち丁未の月。まの廿八日は辛
 未の日やと。其曉天の八鼓に巳丑の時。當たり。又十月の壬子の月。あつて七日に
 己未當りと。開朔日に巳未と。の。所の玄指に。奴家の七日の且六鼓。小生と。り
 所は。是巳卯の時。あり。と。奴家が。本命に。丁丑壬子。己巳卯。と。異なる。辨
 あり。且又奴家が。寫さる。唯庚帖。ふ。実名と。の。ま。小。若子。御寮の。代筆。せよ
 と。の。め。る。べ。と。假字。あ。て。と。ぬ。と。寫さ。う。と。你。い。と。ぬ。と。讀誤。と。奴家。が。名。と
 一も。強。く。秋。こ。の。你。と。強説。と。平假字。の。こ。の。巳。字。の。草。と。上。の。畫。と。結。ぶ。
 あり。と。は。是。止。字。の。草。畧。あり。と。上。の。畫。と。外。に。結。び。て。原。来。另。ある。字。あり。と。奴家
 有。心。で。う。こ。ぬ。と。寫。べき。克。々。辨。へ。ぬ。と。所。て。正。直。の。よ。く。着。急。て。他。意。あり。と。俺。女
 若子が。八字。と。識。さ。る。と。誣。と。あ。ら。う。と。誣。と。あ。ら。う。と。法。々。小。曆。本。と。拿。上。彼。此。と。繰。回。し。つ。

看ておとど現も錯らぬ伊勢曆。僻更らぬ論らぬ直と呆とて物ども得言と姑
摩姫さこそと声掛てそれ看あひて奴家が詞の偽詐をわぬ知あらん。恚どが
庚帖の八字を責あふとも持水が妻とあふき所謂あくと愛あくる言断
従ふべし所見ざりたり。

第四十四回

狼唄の岳翁漫小恩愛と售る
痴情に新郎暗小燕石以抱く

當下正直膝立直。太やうある息と吻と接て原来和女郎在下と父が義絶の第
どと執念く怨とて深くも量と。自滅させと肛と疼んと想ひくこそ有べしなり。
さる怨心雙言の人と識で騙らるるハ愚昧多と。俗まで番ひ言語の結局と舌長
やう小説購ゆる。冤氣と思へ即今這裡ハ和女郎と執と正直が肛截までと念へ
ども。婦女を敵手小結果さハ。前把る躬の名と腐さ。唯運命の極。是非小賢がぬ

次第の宿所小飯と自裁して室町殿小罪科と謝せん。さのりあつた這回の誓姻
和女一名こと恚いふとも。管領も知。遊佐も知。世人も亦知。和女郎のやど
分解とも。竟ハ开身小禍災あらん。暇稟とと氣色と。四下と睨視。遺恨の眼ハ
泣水と浮りて衝起上。刀と把て去んとすと。姑摩姫要時と推扯。先等あふさるり
小腹立る。痒火付と。奴家ありと。些少の主意あつて叔父君小禍害と讓んや父
と義絶の縁由と。以て執念く。宗とへき徐々小座して。奴家が言と。听て尚も尋念
一名の叔父君と。恚で執念く。宗とへき徐々小座して。奴家が言と。听て尚も尋念
一短慮ハ功と成難。と。くハ正直やうやく小奮の席小就。ハ。姑摩姫ハ顔と端
一稟とハ畏憚あつた。你ハ开性老實小在と。故ハ満家就盛持永ハ相議と。て
赫ハ味ハ駒役と。奴家と。茲小亡き人媒妙小世と。ハ。抑今般の親事ハ。満家
就盛ハ謀畧。但ハ持水妻小繫想。一。豪集せんとの入止。詳悉ハ知らぬ。

前回你と媒妁として説来せしる譯あり。後奴家之母の上境は路頭小奸賊を伏
措て轎子と奪んとせしと快く猜し虎口を遁せぬと尚再懲ごまふ院宣諛
意と詐して你と欺瞞き威を以て逼り強て奴家と亦阪の居館へ入ると計り
らるる必定好意ありぬと。信すと虚きその術ふ棄て那里へ去て恥辱ふ遇ハ奴
家一箇が縁由として父祖とも汚し就てハ又叔父君の醜名とも世に露え本意か
き小云々と推辞しと你へ省も思量らるる自害せんとす宜ひ。勢ひ扯ひくも非と
ば為方も多く陽小先許諾しと面色しと你的命を救ひしは是併父小連る枝と
折れと想ふ然れぬと一言も奴家が嫁て持永の妻ありんと鮮明小稟切らる
るは。這の當下の回答と思惟しぬ明々あり。俗て登時按ふは你ハ向足
利家の恩と畏と徳と慕ひて忠と尽きん事との思ふそのまゝ其父小管領
父子の權威と羨む。御心ありと識られ。若子御寮と持永の妻室とせは。你ハ就ち

管領と姫ごちん。あんと與々も有べし。思ひ小く。奴家が代。若子御寮と嫁し
るは。人様とと料理と想ひされども明々地ふ。うちも出る危殆と。左や右の。まゝ
とて故意這期。通らば等と。きてこそ露頭し。侍りし。是。嚮。宣ひ。所謂權
小處する。更ふ。多き。意。非。非。人。權。と。以。て。為。る。時。我。も。亦。權。と。以。て。處。せ。ざ。ら。
る。と。得。さ。ん。ぬ。強。ち。非。禮。と。い。ふ。べ。し。ぬ。と。又。生。来。八。字。の。事。ハ。我。邦。ハ。神。世。ら。
絶。て。も。ら。る。婚。儀。と。誰。人。も。棄。ひ。出。て。奴。家。が。為。と。違。へ。ざ。ら。災。据。と。未。ん。と。
巧。め。ら。ん。と。又。道。と。ま。あ。く。寫。て。你。小。泰。ら。せ。ら。る。亦。是。曩。小。承。と。
非常の禮小對へる。非常の壽策も。侍る。と。小。若。子。也。の。ハ。字。と。以。て。去。給。
若子也。の。病。病。病。响。如。意。宝。珠。院。の。地。藏。并。小。祈。禱。せ。さ。せ。あ。ひ。と。り。兼。塵。小。
掛。る。漆。牌。小。寫。ら。う。と。看。て。識。ら。る。と。さ。ず。其。甚。麼。の。故。と。若。子。也。の。
木。命。と。奴。家。が。知。縁。侍。ら。ん。と。俗。箇。の。譯。と。听。僻。と。て。ハ。滿。家。們。の。証。と。て。幻。符。の。

あつらひのころとときひ。旁痛き痺の非どる約莫幻術といふ痺ハ西域の人も
 教ふその悪俗と取せんとして神衰自在の形相と示せて愚俗と化度する方便
 もと神通とも唱へし唯亦尊く号し而已へ智者小用する事ハ非だ然も
 怎と婦女の身としてさう幻化と克せんや案ふ他ハ幻術の者の自ら幻の如く
 悟として人と以て幻術ありといふふこそあるべし。任他開いたれは八
 字の庚帖も。若子御寮の支干と以て赤坂へ贈遣あるべし。今宵もさう若子や
 送つて那里へ嫁しむ。你の館人采納と贈つて。你の女を娶ん。原身當然の理なり。
 異論といふんやういぬ。さうとも危殆く思ひぬ。猶姑摩姫と喚做し筒様
 筒様小料らひぬ。必成就とべきあり。さうか。如今自滅せんとさう。衆人厄ハ一轉
 して却還出身の基本とさるべし。縱令其滓後ふ至りと。覺覚するとも。他も亦院
 宣説意と詐瞞う。大罪のむと聲と吞と決めて咎ひるる能く。猶さても就盛

們が事むらう。論あり。登時妾你小代す。差能分解し。侍りてん。此も你
 のうふ懸。奈何料理ありん。欵と道とて正直再遍示して。肛裏小想道。這姑
 摩姫ハ青年十七。乳鼻の失さう。少女ある。小神机妙笑。横無盡。怎て。偈まて送
 し。恐怖ハ祖父正成卿も。とさう。及びるふ。現克思惟ハ院宣御説と。唱へ
 し。管領父子。就盛が虚偽さるべし。さうとも俺ハ他們が下風。立止。假令虚
 偽さうとも。発る。宗と受ん。而已。さうとて。今更姑摩姫が。謀畧の如く。せ。後小
 露頭し。さうを。愛女あが。小失し。ん。欵。さうとも。另小思量も。ある。を。就問詰
 て。危氣あ。く。さ。謀ん。と。辛う。じて。困ぜ。面と。拾て。い。さ。う。意。表。小。出。さ。和
 女郎が騙計。さう。絆と。し。初發。さう。知。倒。明。さ。小。縁。故。と。遊。佐。小。報。て。假。父。と
 ある。ゆ。と。辞。せん。ふ。今。と。做。て。い。開。も。及。び。さ。う。と。和。女。郎。が。筭。策。小。後。つ。發
 覚。せん。日。小。甚。麼。様。の。禍。あ。ら。ん。も。料。難。し。且。又。和。女。郎。ハ。美。貌。あ。ら。と。女。兒。若。子。ハ

醜みにくきうへふ。去こ総ぞうの痘う瘡さのいと重おもくて。父ちち母ははども厭いとはらうと。富たか貴きの家いへ小こ生せい長ながらう持もち永ながいと肯うけんや。忽たち小こ憤いりり怒あと起ありて。性しやう命めいとも失しふべし。それも有あ繫け小こ不ふ便べんあり。左ひだりも右みぎも運うん命めいありて。和わ女にやう即すなはち與あ小こ一いつ家け奉ほうじて。滅めつ亡ぼうせん今いま宵よ小こありと怨うらむと姑こ摩ま姫ひめ推おし禁かへめて。开ひら頭かぶの用よう意いもありて。侍さむらい人ひと持もち永なが一いつ遍べんも奴やつ家けと看みらる絆きずをも好この醜みにくと論ろんへるもあらず。除よ非ひ偷ちゆう看みらるもありても。その私ひそのうちのあらと公こう然ぜんとしていふべくもあり。但たゞ満まん家け花はな落らくては面おもてを照ありしめるもありて。去こ総ぞうの痘う瘡さ係けいりて醜みにくく成なれば宣のたまひて一度いちど台たい色しき一いつ方かた入いり。容よう貌ぼうの故ゆゑと去こんと有あ繫け小こ愧かていえらるべし。然しかども一いつ向むか後ご難なん如ごとくと悼おそらるもあり。明あき々々小こ奴やつ家け較けう計けいと報ほうあらふも異いらるべし。偕いて持もち永なが一いつ旦たん怒いかりていふども懲ちやうずままに奴やつ家けと欺あやむと想おもふべきに必かな定ぢやうせらばならば離り別べつともさらん間あらず。漸しやう々々小こ夫婦ふうふの中間あひだも和わくべし。忙いそがら回まわりてさらん間あらず。報ほうて如ごとく料りやうをあらせるもあらず。妻つまが計けいと

猜うひく今いまより寔まことと吐つきも。這この期ご小こ迫せまりて就ありて盛さか盛さか們ら你おのの罪つみとせらるもあらず。解と道みち尋たづ思おもひらるもと掌て小こ拿とるも如ごとく論ろんをあらせるもあらず。正ま直ちやう稍しやう況げん吟ぎん下げ。絆きずと偽いつては危あやまし行いらるも原もと来きた好このぬもあらず。今いま宵よと成なれば殊こと更さらふも做なすべきに為なるもあらず。家いへ小こ回まわりて木きの石いし們ら小こ商しょう量りやうして後あとをあらせるもあらず。和わ女にやう即すなはち異い見けん小こ憑たらるもあらず。叔しやく父ふ君きみ小こ怨うら恨みと受うけられば快こころくもと身み小こ繫けるもあらず。火ひを拂はひ難くもあらず。回まわりて怒いかりて。近ちかき小こ就ありて盛さか盛さか們ら奴やつ家けと悪わるくもあらず。為なるもあらず。登のぼりて尋たづ念ねんもありて。先まづ亦また段だんの動うご静しやうと看みらるも後あと小こ料りやうらるも様ようあらず。你おのの心こころ利きらるも奴やつ隷らいと甚たまらず。那な里り差さては隠かく々々小こ内うち外そとの動うご静しやうと窺うかがひしるもあらず。肝かん要ようともあらず。安やす次じ承しょうりて开ひら頭かぶの用よう意いと做なすべきに。

却説正直へ回ると就て木石苦子と喚出て先と頻々歎息す。木石苦子の意も
 多る辨とも思ひ難く左右より。那首の首尾の意あり。姑摩姫との意もせし。
 病病の寢ていと送代向かれば正直の怨や。泣水と二眼浮べ道や。酢で
 も味噌でも食難き姑摩姫が机裏の謀畧箇様々々と悄めき告て憊る辨と
 知るべ。初発より作麼様の院宣詮意うとも。死力を盡して辞せうり。小
 鈍も他小騙らと。冤氣の今更悔て復らば然とて少女と敵手小刺
 違へても死ぐに。只這上の正直を命運極まる處を尋常小肛切て違約の罪
 と謝せんよう。外小尋念の念ゆくと。所て駭く木石苦子。要時小呆とて物も言
 ぞ泣水さへも猛可小出糸ハ惘然とと在る。木石の稍湧出る。泣水と抑へて
 いひくる。今と論人の愚痴小伝と。那持永が其最初。你と媒妁小囁
 とり。辞めると屢のいと。你の所て提持る。果と姑摩姫従はざると持永

執念く父小報て果して如女有難美小及べり。遮莫今番ハ上様の御説とあり
 と奈何のせん。と犹姑摩姫ハ任情小詐偽して終小你的大事と。うり。今兄
 君と義絶の故めて。さばり猶念く恨。秋さうと甚の女子あり。這ハ初発
 ありの。始末と遊佐へ報る。那人を計議の。今徒小肛切て謝る。と
 這僕ハ世の胡慮と。人而已の。先遊佐へ報ると。怨と悲と諫むと。正直頭と
 打掉て。辨適来の通と。赤阪の準備と。等へ云と。ひて勸解と。持永
 就盛必咱と脱落と。京へ稟と。罰する。然らば咱們が今迄の忠勤も
 水沫と。又且人の胡慮と。人只潔く自害と。赤き心と現え。咱亡後ハ
 你們母女風爐ハ即と商議して。這等の由と訴へて。冤恨を雪ある。とい入と
 木石推禁めて。そのま。益なき辨小伝。と。小思食さう。バ姑摩姫の。如く
 苦子と悄々小赤阪へ送りて。今宵の急難と。先遁と。ハ看る。那姑摩姫の

腹黒あり。開腹立く侍ども。人を騙して那邊這邊と辨れ脱る手段あり。然とて孰も及ぶ的か。恁まば他がふまふ小行ひて試みる。萬一個も急難と脱るるの有りやせん。開上あても災難のふん身上係るるに當下めん肝口も遅くの信らぬ辨あつとや。さうば奴家もめん伴當して眞土より騙らとて究兵小報のべ。渡莫這児が容員の十名並もひらさるふ去稔の痘瘡は最重くて癩芝痛く痕まば。那驕誇る持永ぬしの終身全小看るべくもひらとて還集守小る果て物どのと想せん。念へ最々差方あり。不便小信り。と聲立てようとするり小俯沉う。念復して若子と顧と。や若子听ひて適来。参々公の宣ひ。おん身小迫る今宵の大厄。脱る路のき休小切ておん身と姑摩姫が代りて赤阪へ送り千の一個も。参々公の命と救ふべき縁もやひらんと思ふ。任遣おん身と差ととも。持永の好色の性。と所大抵の棄て一切顧まざる。或は忽ち離另もせん。欣開

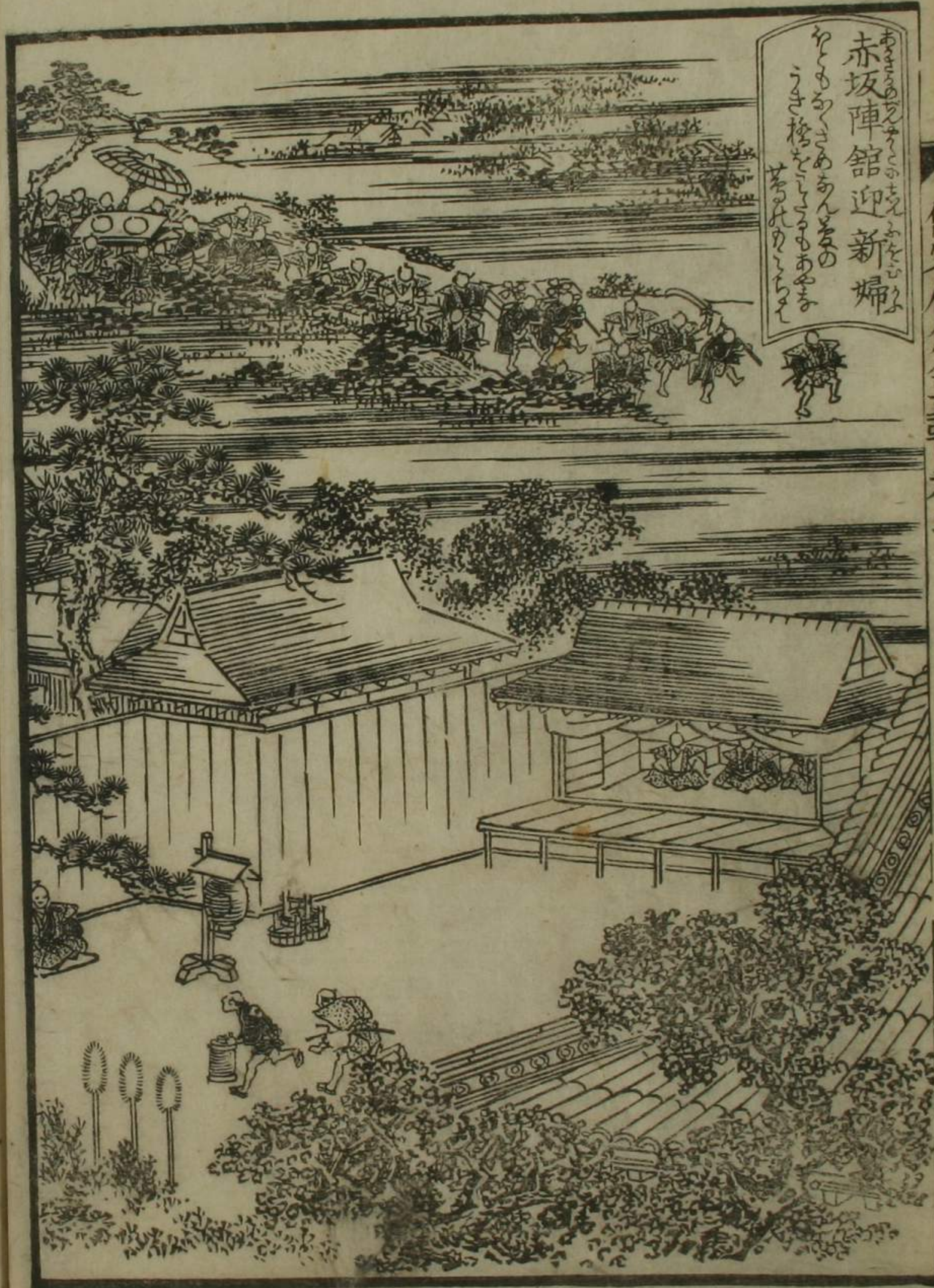
を識つて去けこのふ。母親が心の腸と。断ちりある念慮も。参々公の命と換難く。父母の與失節義と破す。仇讎言小従ふ人も。夜夜遊女や。做果とて孝貞と全くせ。夏和漢小例る。おん身も。知らる省听解と去べき。と道とて若子の悲しきも。亦羞愧しき。十寸鏡移る容員の俺も。厭々躬を漂蕩出て。浮薄なる人の妻とあつとも。恁とて名野の女郎花。花咲く秋小遇べや。徒ふ茶折ん衣手の露。絶ぬ心俺の。母曾の杜若敷とも。さうばき辨と識る。推辞る今眼前。父の命と多霜小比へて氷の及ふ伏人と。謂る辨の理も。母親の教諭の切ある。最上の川小曳といふ。船の不字字といふべも。涙の滝は間。そのも念する因果と。只俯伏と居る。念断てのひたつ。想懸るき姑摩姫との。猛可の違變。小父への。おん分説立とて。おん肝と若子と。宣へする。母への。拙者承らるふと。奴家と代。赤阪へ差。あふの命の趣。恁と背き信る。き且のこ



大坂陣館五車巻二

六三

大坂陣館五車巻二



赤坂陣館迎新婦
 赤坂陣館迎新婦
 赤坂陣館迎新婦
 赤坂陣館迎新婦

大坂陣館五車巻二

大坂陣館五車巻二

まはる御教訓の切多言の愚痴多。耳もあつて心得は。さあつたがう。奴家が親
 の姑摩姫の小紛人やど小生稟てもさあつた。浪風立と俸治と。久後までも父へ
 のお人與夕くは信るまじ。死を信る身とて泰もあつた。忽丈夫小厭とて復御幼勞と
 繫せせん。開の苦うひやう。原末も人並やぬ。躬に最熟知。人見べし。思ひは
 ぞ。豫てより尼法師も。おんと思立。きん折少。髻切。涙と涙。思ひは。と
 有繫健氣。小言稟す。木石の涌上。泣水と抑へて背拵捺。開の克解。解らひ
 う。されども俸と急過。女僧小あつた。一度の係。想ひもあつた。怎生醜き女多
 とも。俗小云相縁奇縁とやら。俺身を責て克事へ。終是丈夫も感歎して。睦
 あり事あり。這ハ豫てより教へる。回も意得。道つ正直打向。即今听せ。あ
 が如く。苦子も納得。とひ。姑且御生害と。由と。あひて。姑摩姫の。小。那里へ。送
 て急難と。道と。あつた。正直の。黙然と。頭と。拾げ。彼。左見右見。嘆息

。現你们が負操考烈きもの。べき該あつた。寔小正直智慮浅くて。那里あつても
 這里あつても。欺騙と。俸と念。險不慚愧。小堪難。任。這。終
 自滅を取ん。朽惜。云。小。姑。小。送らん。任。教。在。下。故
 以て。你们母子と。苦。最。本。意。不。便。復。數。回。嘆。息。と。木
 石。を。慰。め。て。然。と。何。の。人。這。う。へ。甚。麼。俸。も。奴。家。小。任。せ。る。か。那。里。お
 去。の。將。為。様。も。俸。發。覺。の。後。此。手。段。も。這。兒。小。最。能。教。へ。し。案。ふ。り。の。産。が
 易。と。鄙。き。諺。も。然。る。れ。然。る。れ。想。屈。も。あ。つ。た。お。子。が。乳。母。子。浦。風。の。幸。小。年。も
 長。て。心。伶。利。物。馴。ま。つ。た。他。小。萬。と。意。得。き。て。輿。副。小。差。と。べ。と。豫。て。定。措。は。れ。が
 枕。と。進。退。を。分。付。る。べ。期。小。臨。と。脱。落。の。あ。ら。じ。お。や。苦。子。よ。夜。も。更。も。這。方
 来。て。化。粧。も。疾。々。収。拾。も。と。拽。立。と。輿。へ。入。る。ま。つ。た。正。直。と。目。送。て。千。回。悔。め
 ど。又。更。小。謀。の。出。る。と。知。ひ。姑。且。の。言。小。任。せ。つ。只。危。と。居。う。る。畢。竟。苦。子

あつさう まいり めがら
が赤阪へ嫁くと。又什麼ある話説うある。开へ次回ふ分解うを听候。



閑卷驚奇俠客傳第五集卷之二終

玉原松今日も

しと女

まことおとこ

十

おと

